

---

# マ・リ・カ！

カモネギ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

マ・リ・カ！

### 【Zコード】

Z8569H

### 【作者名】

カモネギ

### 【あらすじ】

九条英貴 くじょう うえい には、5年間関係を温めつけた彼女、魔理歌 マリカ がいる。ようやく婚約の約束をとりつけたものの、彼女の国より、謎の老婆ガルダが現れ、九条に婚約の破棄を迫ってくる。話によると、マリカはオハラマ王国の王女で、異国の中を体験する実地研修のため、日本を訪れていたのだといふ。ごく普通のサラリーマンである九条との婚約は断じて認めるわけにはいかない。大学時代からの友人修 シュウ も、実はオハラマ王国の近衛騎士であることも判明。なし崩し的に、九条はオハラマ王国

を訪問する」とになる。

(一)

「やつべ、すつげえ会いてえ」

残業も早々に切り上げて地下鉄に飛び乗った俺は、我知らず咳いていた。

周囲の乗客たちに奇異の視線を向けられて、やばいのは自分の言動だということに気づく。俺 九条英貴 くじょうえいき は、苦し紛れの咳払いをして、何気ない仕草で車内の広告に目を移した。今日は月曜日。次の土曜日まで一番長い時間のある、ちょっとブルーなはずの日。

だが、俺の周囲には、ブルービニルかピンク色のシャボン玉がふわふわと舞い上がっていた。

昨夜……俺は、プロポーズを成功させたのだ！

お相手は魔理歌 まりか という二十四歳の女性で、俺とは同じ年である。

まあ、美人ではあるのだが、それ以上に可愛らしいタイプ。両肩の上できれいに切り揃えられた栗色の髪に、淡雪のような白い肌。そして淡い空色の瞳。鼻はそれほど高くはなく、驚くほど顔が小さい。実年齢よりも若々しくて、十代後半くらいに見える。アメリカのホームドラマに出てきそうな、明るく素敵な外国人の彼女だった。魔理歌という名前は発音だけが正解で、どうやら当て字らしい。国籍は……実は、まだ教えてもらっていない。日本語がペラペラなので、こちらで過ごした期間が長いのだろうと推測された。

魔理歌とは大学からの付き合いで、ある意味、涙が出るほど苦労した。

いや、過去形で語るのはまだ早いだろ？。現在進行形で、今なお苦労している。

五年前、体中の勇気を振り絞つて告白した俺に、魔理歌は白い頬を染めながらじくりと頷き、たつたひとつ、絶望的な条件をつけてきたのだ。

『わたくし、結婚するまで、身体を許すつもりはありませんの』

一瞬、全身の血が引く音が聞こえた。

やや視線を下げて、形のよいバストとほつそりとしたウエストを視界に入れ、フリーズしかかった頭をカラカラと回転させながら、俺はこう言った。

『ボ、僕モ、ソノツモリテスッ！』

そして二人の、嬉し恥ずかし中学生のような、清らかな交際がスタートしたのである。

魔理歌は白くてふわりとしたスカートを好む家庭的な女性だったが、家事はまったくできなかつた。見事な肩透かしである。付き合い始めてすぐに同棲したのだが、お茶くらいしか出してもらつたことがない。しかも、ペットボトルのお茶を注いだだけ。

……まあいい。そんなことは些細な問題だ。

今、俺は高らかに宣言する。声には出せないので、心の中で宣言する。

俺は、ついにやりとげたのだ！

学業と家事を両立し、バイトをして結婚資金を貯め、就職活動に勤しみ、ますますの企業に就職し、笑顔を絶やさず、一切不満を口に出さず、もちろん浮気もせず、見事に試練を乗り切つたのだ！

偉いぞ、俺。よく頑張った！

大学時代についた俺のあだ名 つくる男。

その名も報われたというものであろう。

熱い感動と感涙を噛み締めているうちに、電車は駅に到着した。俺が住んでいるアパートは、会社から地下鉄一本で、約二〇分。朝の通勤ラッシュもそこそこで、生活環境的にはわるくない。部屋の間取りはワンルーム。ロフトがついているので、実際にはひと部屋半といったところ。家賃は安く、会社の補助のおかげで、さらに負担は少なくてすむ。

新婚生活のために、もつと大きな部屋を選んでもよかつたのだが、この年にして俺は「家庭」というものを強く意識していた。近い将来、マンションを購入する資金を貯めるために、あえて粗末な我が家を選んだというわけだ。すまない魔理歌、いましばらく辛抱してくれ。

改札口へと向かう下りのエスカレーターに乗りながら、腕時計を確認する。これだけは無理をして買った、オメガのシーマスターだ。午後七時半。

魔理歌はお腹を空かせて待っていることだろう。俺の名前と夕食のメニューを呟きながら、テーブルの上に突っ伏しているに違ない。

さて、今夜の夕食はチャーハンか、焼きそばか、野菜炒めか……。そういえば、キャベツがなかつたな。それと、お茶の葉が残り少なかつたはず。

駅前のスーパーに寄つて帰ろう。

もちろん、ダッシュで。

「待つてよお～、まりかあ～」

改札口を出た瞬間、俺はまたもや危ない言動で注目されてしまつた。

両手がふさがっていたので、俺はインターフォンを押し、「帰ったよ、ハニー」

と、赤面ものの台詞を口にした。

今だからこそ分かる。愛といつ女装距離があれば、羞恥心といつ壁すら突破できるのだ。

もちろん、部屋の鍵は持っているので、買い物袋をいつたん置いて、扉を開ければいいわけだが、やはりその役目は彼女に任せたい。そして、こう言われるのだ。

『お帰りなさい、ダーリン』

と。

照れくさそうにはにかむ彼女。俺は勇気を振り絞つて、二度目のキスをする……。

驚くことながれ。プロポーズをした昨夜、俺と魔理歌は初めてのキスをしたのだ。

婚約が成立して、ようやく唇を許してもらえたわけである。思わず涙を零してしまったのは、本当の話。

力チャヤリ。

「お帰りなさい、だりん」

甘美な妄想に浸っていた俺は、まったく予想外の展開に、思わず買い物袋を落としてしまった。安売りの卵が割れてしまつたかどうか、確認する余裕すらなかつた。

台詞はよい。完璧だ。

だが、声が違う。発音 イントネーション が違う。

笑顔が違う。髪が違う。目が違う。手も足も、雰囲気も いや、

それ以前に、人物そのものが違つた。

俺の目の前で邪悪そうな笑みを浮かべたのは、齡八〇を越そつか という白髪の老婆だつたのだ。

だりんと呼ばれてしまつたぞ。

魔理歌にも、まだ呼ばれたことないのに。

「……あ、ハイキ。お帰りなさい」

細長い廊下の奥から放たれた、天使の声。

「こちらは本物の魔理歌である。ちょっと表情が曇っているような気もするが、相変わらず可愛いらしく。家中だといつのこと、まるでお出かけ用の白いワンピースが、何とも場違いで、よく似合っていた。

「なあにを固まつておる、わつと中に入らんか！」

魔理歌が天使の声ならば、こちらはしわがれた地獄の声だらう。謎の老婆は、俺の胸ほどの背丈もなかつた。

白い髪を頭の後ろで団子にしており、濃い紺色の小さな花柄のワンピースを身につけている。こちらもまあ、体型的には似合つていると思うが、可愛いらしくはない。しわだらけの顔に気難しい表情を浮かべながら、射抜くような視線で俺を見上げていた。

「えつと、どちらさまでしようか？」

当然ともいえる俺の問いに、老婆は不機嫌そうに鼻を鳴らす。

「ふん、話はあとじや。まずは食事の支度をせー！」

「は、はあ。……あの、魔理歌？」

困ったような表情の彼女に説明を求めた俺は、

「ドスン！」

「ぐはあつ！」

突然、腹に重い衝撃を受けて、その場に尻餅をついた。

「な、なんだ！？」

「エ、エイキ！ 大丈夫ですか！」

魔理歌が叫んで駆け寄つてくる。「つずくまる俺の後頭部に手を当てて、よしよしと撫でてくれた。

いや、それは「おりこうさん」の撫で撫でだらう。腹とは関係ないぞ。

突つ込みを入れる前に、魔理歌は老婆に向き直つた。

「何をするの、ガルダ！」

「マリカさまを呼び捨てにするなど、言語道断ですじや。まずは、

その思い上がった性根を叩き直す必要がありますからの「  
わけが分からぬ。老婆に殴られたわけではない。

突然、衝撃だけが襲ってきたのだ。

ひょっとして これが氣孔といふやつか?

幸いなことに胃液を撒き散らすことなく、荒い息をつきながらも  
俺は立ち上がった。

老婆は邪悪な笑みを浮かべている。

ううつ。

俺の頭の中に、危険警報がびびびと鳴り響いた。

本能的に悟った。

この婆さん、やばい。よく分からんが、本気でやばい!  
限られた情報から、できる限りの状況を把握し、即座に行動に移  
す。相手の表情と雰囲気から、感情を読み取る。

これが俺の 営業マンの技術だ。

「ま、魔理歌さま。まずは、お食事の「」用意をいたしまス  
「あ、あの、エイキ?」

「わや、お客さまも、奥の部屋へ。むか苦しことこヌテスガ

「……む、変わり身の早いやつじやの」

二人を部屋の中に押しやつてから、俺は全力投球で夜食作りにと  
りかかった。

もちろん、時間稼ぎのためである。

混乱する頭の中で、俺は必死に状況を整理した。

マリカさま あの老婆は、魔理歌のことを確かにそう呼んだ。  
今どき「さま」付けされるような人間など、限られている。とい  
うよりも、絶滅危惧種に近いだろう。

ずっと前からそうではないかと思つていたのだが……。

やはり魔理歌は、いいところのお嬢さまだったのだ!

外国の社長令嬢とか、ひょっとするともう一ランクアップして、  
財閥の令嬢とか!

それならば、家事手伝いがまったくできることも領けた。

世間知らずで、電車の切符すら買えなかつたことも納得できた。まずは、冷凍していたご飯をレンジで解凍。その間に豚バラ肉、卵、キャベツ、アスパラガスなどを準備する。チャーハンだけではさすがに寂しいので、野菜スープと作り置きの焼売、さらにサラダを作ることにする。

「うーん。デザートに、杏仁豆腐も出すか

こちらは作り置きがある。

おそらく、あの老婆は魔理歌の世話役か、あるいはお皿付け役で、俺がプロポーズしたことを魔理歌から聞き、駆けつけたのだろう。

……何のために？

決まつていて！

俺という人間を見定めるため。

あるいは、婚約を解消させるため。

「げげつ、やばいじゃねーか！」

チンツ。

ご飯の解凍完了。中華鍋の中で油を滑らせ、まず卵を炒める。ジユジユジユ 焦げ目がつく前に皿に引き上げ、ご飯と具にチエンジ。俺の特製チャーハンは、日本酒と中華スープの素で味付けをする。水分が多くなるご飯が重くなるので、手早く鍋を扱う必要があるのだが、そこはそれ、腕の見せどころといつやつだ。空中で直接ご飯に火を当て、ちりちりと水分を飛ばしていく。

出汁をとつてスープを煮込む時間はなさそうに思えた。固形スープの素を選択。具はレタスと玉ねぎと卵。片栗粉でとろみをつけ、塩胡椒で味を調える。

身分違いも甚だしい！

おそらくあの老婆は、そう思つてゐるに違ひないだらう。

俺は何者だ？ 日本社会の片隅であぐせく働くサラリーマンだ。最前線の営業マンだ。

今月の給料は、手取りで一八万三千五百円。家賃、光熱費、食費を除くと、約二二万。月八万円をマンションの頭金用に貯金してい

るので、自由に扱える金額は少ない。

「課長に飲みに誘われると、厳しいんだよな。奢ってくれないし……」

課長の家は小遣い制だ。先輩の話によると、月一万五千円くらいだそうだ。それでも俺を誘つてるのは、やはり上司として、部下とのコミュニケーションが必要だと感じているからだらう。

そんなに気をつかわなくてもいいのに。お互い金がないんだから、牛丼屋でビールでも飲めばいいのだ。

安いし、美味しいし、お腹も膨れるし……。

「ふむ、牛丼か」

そういうえば、どう頑張つても、あの味が再現できないんだよな。俺の作る牛丼は、それはそれで魔理歌に好評なのだが、何かが違うような気がする。

そう。あとひと味足りないような……。

「煮汁が違うんだよな、ぜつたい」

昔、牛丼屋でバイトをしていた大学の友人に、こっそり秘密を聞いてみようか。

杏仁「豆腐をきれいに平らげ、ウーロン茶をすっかり飲み干してから、老婆は高級そうなハンカチで口元を拭い、ちょっと悔しそうにガルダと名乗つた。

おそらく、俺の料理にケチをつけるつもりだったのだろう。だが、魔理歌のために研究と努力を積み重ねてきた俺の料理は、そんじやそこらの定食屋では相手にならないほどの領域 レベル にまで達しているのだ。安い食材を使わせたら、レストランのシェフにも負けはしないだろう。

「あいかわらず、エイキの作るアスパラあんかけチャーハンは、美味しいです。杏仁豆腐も……エイキは食べないのでですか？」

幸せに満たされたような表情で微笑んでいる魔理歌。

俺はエプロンをつけたまま、愛想笑いで給仕の役割をこなしていた。

食卓が狭く、一人分しか並べられないため、あとで食べようと思っていたのだが、この婆さん、三杯もお代わりをして、俺の分まで平らげやがった。

「ふん、富殿の料理に比べたら、まだまだじゃの」

なら、お代わりするなよ！ と突っ込みそうになつた俺は、新たな単語に瞠目した。

「……あの。富殿といいますと、どちらの富殿でしょうか？」

「シャドウー・テン富殿に決まっておろうが。何も知らんのか？」

しゃ、しゃーどうーん……なんだ？ 聞いたこともない名前だな。

「異国での実地研修を修業なされた姫さまは、これよりオハラマ王国へと」帰還あそばされ、王妹殿下としての公務につかれる。おぬし、九条と言つたか。この場で姫さまとの婚約を解消し、別れを告げよ

「ぐはあつ！」

異国での研修、姫さま、オハラマ王国、王妹殿下……。重要なキーワードの意味を追求する前に、「婚約解消」という言葉に打ちのめされた。

エプロン姿でお盆を抱えながら、俺は魔理歌と過ごした五年間の、清らかで美しい、そしてちょっとぴり切ない過去を、走馬灯のようについて出していた。

すべてを犠牲にして、ただひとつのみを追い求め続けた、青春の日々。

最後の最後にして、俺は、この手につかむことができないのか！

婚約成立という天国から、婚約解消という地獄に突き落とされるのか！

ショックのあまり返答すらできない俺。

代わりに怒りを露にしたのは、魔理歌だった。

「ガルダ！ わたくしは、そのような話、聞いてはおりません！ 研修期間は本人の意志によつて決められるはずです。それがたつた五年だなんて わたくしは、エイキの命が尽きるまで、最低でも五百年はここにいるつもりです！」

いや、魔理歌さん。いくらなんでも、俺の命はあと百年もたないぞ。

「それよりも、何故あなたが、エイキとわたくしの婚約を知つていいのですか？ わたくしは、王国に報告した覚えはありません。説明なさい！」

魔理歌は色白の頬をわずかに染めて、無理やり眉根を寄せていた。両手の小さな拳をぎゅっと握り締め、相手を威嚇するように……。何というか、ふんすか怒つたという感じだな。

しかし、魔理歌の怒つた顔は、初めて見たよつた気がする。それはそれで可愛いと思うが、珍しいこともあるものだ。

ガルダ婆さんにとっても、予想外の反論だつたようである。「ああ、マリカさま。そのようにお声を荒げて、おいたわいや……。それもこれも、低俗なこの世界がわるいのです。狭くて息苦しい囚人部屋のような、この住処がわるいのです。どこの馬の骨とも分からぬ男と、しかも、婚約まで強要されて！ 僥越ながら、姫さまは騙されていらっしゃるのです！ 一刻も早く、王国に戻りましょう。さすれば、このよつたな平々凡々な男のことなど」

「……」

その言葉は逆効果だった。

お気に入りのものを、他人から否定されればされるほど、逆にむきになつてしまつ。そんな単純な心理法則を、ガルダ婆さんは知らなかつたようだ。

無言のまま、魔理歌はすつと立ち上がると、俺の背後に回り込んだ。

そして、しなやかな両腕を俺の首に回して、ぎゅっと抱きしめた。

「わたくしは、エイキと結婚します。誰にも、邪魔はさせません！」

わあっ、胸の感触！

などと、ときめいている場合ではない。

老婆の様子を確認すると、しづくちゃんの口元を歪め、目を白黒させ、壊れかけた口ボットのようにがたがたと震えていた。怒りとうよりは、恐れをなしたという感じ。

……ふむ。魔理歌とこの老婆は、主従の関係にあるようだ。明らかに、魔理歌の方が立場が上。ということは、魔理歌を味方につけている俺の立場はどの程度のものなのだろう。

俺は魔理歌の手に自分の手を沿えて、甘く囁いた。

「ありがとう。俺も、婚約を解消するつもりはないよ。君を、愛してるから」

「エイキ……」

そして、ガルダ婆さんに向かって、にやりと笑って見せる。魔理歌からは見えない角度で。

「ぐつ！ お、おぬし！」

ガルダ婆さんは敵意むき出しの目で俺を睨み、両手を胸の前で合わせた。

や、やばい。先ほどの不可思議な技か。

だが、俺には魔理歌が抱きついている。

俺を攻撃すれば、当然のことながら魔理歌にも危害が及ぶわけで……ガルダ婆さんは無念そうに、がっくりと肩を下ろした。

この瞬間、俺とガルダ婆さんの立場は逆転したわけである。

ふふん、わるいな。だけど、いきなりの暴力はいけないと思うぞ。その場の空気を取り繕うように、俺は「ほんと咳払いをした。

「とにかく、だ。俺には何のことかさっぱり分からぬ。魔理歌の国のこと、魔理歌自身のことも。まだ何も聞いてないからね」「い、いめんなさい、エイキ。本当は、話そつと思つたの。でも、その前に、ガルダが来てしまつたから」

それは知つている。今朝、会社に出かけるときに、魔理歌は言つたのだ。「今日は大切な話があるから、早く帰つてきてくださいね」

と。俺としては、話よりも「こつてきますのチユウ」が欲しかったのだが……。

「じゃあ、今夜はゆつくつと、その辺の事情を説明してもうおつかな。一人きりで」

「……はい」

俺と魔理歌のやりとりを、信じられないといった表情で見守っているガルダ婆さん。

わるいが、話の主導権を渡すわけにはいかない。

「ちらはまだ、情報不足の準備不足。顧客の要望も知らずにプレゼンテーションをする馬鹿な営業はいないのだ。

「というわけで、申し訳ないけれど、ガルダさんにはいつたん、お引取りいただこつか」

「そうですね」

俺の背中にしつかりと抱きついたまま、魔理歌はガルダ婆さんには、有無を言わせぬ口調で命令した。

「ガルダ。あなたのお話は、明日つかがいます。ですから、今日のところはお帰りなさい」

「ひ、姫さま……」

「それと」

ぎゅぎゅ。

わおつ、胸の感触！

「婚約だけは、絶対に、解消しませんから！」

ああ、五年間、我慢した甲斐があつたなあ。

どこか心細げな声が、俺の名を呼ぶ。

茫然自失といった様子の俺は、返事をするのも忘れていて、再び

呼びかけられるまで、その声に応えることができなかつた。

「エイキ……」

「ん？ ああ、どうした？」

部屋の明かりは豆電球一個。オレンジ色の淡い光と薄い闇の中、じそじそと魔理歌が身を寄せてきた。

俺と魔理歌はいつも同じ布団で寝ている。

だが、布団の中で許されている行為は、手を繋ぐことだけ。これはある意味拷問に等しい状態なのではないかと、何度も悩んだことか。

魔理歌は寝つきがいい。先に眠ってしまった彼女の体温、ぬくもりを感じながら、俺が己の欲望を抑え、眠れるようになるまで、同棲を始めてから半年ほどかかった。

のんびり屋の魔理歌だが、約束を守ることに関しては、極めて頑固な一面を見せる。

たとえどのような状況であれ、俺が魔理歌の身体を望んでしまえば、まるで童話の中の妖精のように、彼女は消えてしまうだろう。そんな確固たる予感が、俺にはあった。

「……わたくしのこと、嫌いになりましたか？」

俺の胸の上に小さな頭を乗せて、魔理歌が問い合わせてくる。

ガルダ婆さんを追い返したあと、俺は魔理歌から彼女の事情を聞いた。

とりとめのない長い話だつたが、簡単に要約すると……。

魔理歌はオハラマ王国の王女という身分である。

オハラマ王国の王族には、他国の生活を経験することを目的とした実地研修制度があり、魔理歌は身分を隠して日本の大学にやつてきた。

そして、俺に会つた。

研修期間は自分で決めることができるので、魔理歌は俺との生活が続く限り、日本に留まるつもりでいた。

だが、魔理歌の教育係であるガルダ婆さんが、俺と魔理歌の婚約

話を聞きつけ、突然訪ねてきた。

ガルダ婆さんは俺と魔理歌に、婚約を解消するように求めしてきた。

……以上である。

それにもよって王女をまとは。

童話や漫画の中ではよく出てくる身分はあるが、まさか実際に自分が出会って、ポロポーズまでしてしまったとは思わなかつた。

想定外の事態に、戸惑つばかりである。

だつて王族だぞ、王族。金銭面の格差プラス、身分の差までついてくるじゃないか。

格差婚もここに極まれり、である。

オハラマ王国とやらが、どの程度の規模 もの わのかは知らないが、国家権力に逆らつて無事でいられると思うほど、俺は楽観主義者ではなかつた。会社では上司に逆らつただけで査定が落とされてしまつほど、弱い立場の俺なのだから。

もし王国側が、魔理歌を取り戻そうと強硬な手段に出てきた場合、俺が選べる道は一つにひとつ。

魔理歌とどこか他の場所に身を隠すか、あるいは、ともに王国へ出向くか、だ。

いや。魔理歌がガルダ婆さんを説得して、帰国を諦めさせるところ道も、まだ残されているはずだつた。

そう、判断を下すのはまだ早い。

覚悟を決めるには、時間が足りなかつた。

「……エイキ？」

難しい顔で考え込んでいたせいで、魔理歌を心配させてしまつたよつだ。俺はさらさらとした黄金色の髪を撫でながら、子供を安心させるように言つた。

「嫌いになるわけないだろ？ これからのこと、考えていただけさ」

「これから、どうしましょ？」

魔理歌もまた、考えがまとまつていなによつである。

「ううん、昨日の今日だからなあ。ガルダさんは、事実確認のために、ここへ来たんだと思う。誰が伝えたのかは知らないけれど、王国の大部分の人は、俺たちの関係を知らないんじゃないかな？」

だが、明らかに監視はされているはずだ。

魔理歌は誰にも話していないというし、俺も「く限られた友人にしか、自分の決意を語つていない。どこから情報が漏れたのだろうか。

「でも、まいつたよ。いきなり婚約を解消しろだもんな。やつぱり、東洋人を王族に迎え入れるのは難しいのかな？……歴史的に、そういう前例つてある？」

魔理歌は小さく頭を振ることで、俺の問いに答えた。

……だろうと思った。

逆の立場で考えてみればよく分かる。日本の皇族に金髪の外人さんがなるなど、想像もつかない。

「婚約つていつたつて、お互いの両親に認められたわけじゃないし。法的に考えても、どこまで効力があるのや？」

「だいじょうぶです！」

やけに力強く、魔理歌が断言した。

「わたくしの国では、約束は神聖なもの。契約の神イシュディスに逆らうことは、たとえ国王であつたとしても、許されることではありません。わたくしとエイキの双方が、婚約の解消を宣言しない限り、他の誰にも、二人の絆を断ち切ることはできないのです」

聞いたこともない怪しげな神さまの名前が出てきたが、深く追求することはやめておこう。もう夜も遅いし。

……しかし、そういう文化だったのか。

それならば、約束事に関する魔理歌の頑固さも理解することができた。

「二人の、絆……か」

それは果たして、強いものなのか、それとも弱いものなのか。くだらないことを考えていると、魔理歌が俺の上に覆いかぶさつ

てきた。

「エイキ……」

「！」

ふいに、唇が重なった。

情けないことに、俺はキスに慣れていない。大学時代などは、一度もする機会に恵まれなかつた。

呼吸が止まる。遅れて、鼓動が高鳴る。

互いに触れ合つていた時間は、五秒か一〇秒か、あるいは一分か。甘い気分を堪能することもできずに、俺はただただ驚くばかりだつた。

どちらかといえば、魔理歌は内気な女の子だと思つ。

あまり激しい感情は表に出さないし、外で手を繋ぐことはあっても、腕を組むことはない。無防備そうに見えて、実はダイヤモンドのようになに身持ちが硬く、彼氏である俺ですらキスをするまで五年の歳月が必要だつた。

その魔理歌が、瞳を潤ませて、呼吸を乱しながら、確認してきたのである。

「わたくしたち、婚約者、ですよね？」

「……あ、ああ。もちろん、そうだけど」

「でしたら……その……」

肩にかかるくらいの髪が、ちょうど俺の頬に当たつてくすぐつたい。

影になつてよく見えなかつたが、魔理歌の顔は今、鬼灯のよつて真つ赤なのだろう。

「全部は、ダメですけれど、その……」  
は、鼻血が出るかと思った。

いや、Hなことを想像して鼻血を出す人間が、現実的にはほとんど存在しないことを、俺は知つてゐる。

といふか、全身の血が沸騰しそうなほど、俺は興奮してしまつたのだ。

「胸だけなら、触つても、かまいませんから」

……ま、じ、で、やばい！

と。

ここまでが、俺の妄想ではなく、昨夜の回想である。

にへらにへらにへらへら……。

目の下にクマを作り、しまりのない笑みを浮かべている俺は、どんな角度から見てもネジが一本抜けた危ない男だろう。もうお昼どきだというのに、気味わるがつて誰も話しかけてこない。

広くはあるが、雑然としたオフィス。俺が所属している営業部には、7人の営業マンがいるのだが、俺以外は全員外に出払っていた。俺はひとり、パソコンで客先へ提出する資料を作っていた。はつきり言つて、ほとんど手につかない状態だった。

いかんな、これは、給料泥棒ではないか。

しかし……にへらにへらにへらへら。

「おいつ」

ぱんと、頭を叩かれた。

「ん？……ああ、修しゅうか。どうしたんだ？」

俺の隣で丸めたノートを手にしていたのは、大学時代からの友人で、同期入社の田中修一だった。

身長一八五センチオーバー。正確に測つたことはないが、八頭身の体形で、まるで英国人のように足が長い。顔立ちは彫りが深く、ホスト並に整つている。髪は耳が隠れるほど長さ。黄金色に派手に染め、芸の細かいことに、濃い紫色のカラー・コンタクトまで入れている。就職場所を間違えたのではないかと疑いたくなるほど、その存在に違和感を感じさせる男だった。

うちの会社は私服が許可されていて、社外に出ることのない開発部門などは、ラフな格好でだらだらとキーボードを叩いているもの

だが、こいつは一部の隙なく、高級スーツを着こなしていた。ぴしりと音まで聞こえてきそうだ。

……お前、本当に俺と同じサラリーマンか？

「どうしたじやないだろ？ もう昼飯の時間だぞ」

「そういえば、さつきチャイムが鳴ったような気がする。

「つたく、にやにやして気持ちわりいな。ほら、さつさと行かねーと、店がいっぱいになっちゃうぞ」

格好いいくせして気取らないその態度が、女性たちのハートを根こそぎ轟づかみにしているらしい。どうでもいいことだが。俺は作りかけのファイルを保存して、立ち上がった。

「誘つてくれるのはうれしいが。いいのかよ、あれは」

やや後方を確認すると、数人の女性社員が、フロアの入り口付近でたむろつており、獲物を狙う獣のような目で、俺たちの様子を窺つていた。

修を食事に誘おうと待ち構えている、通称 「修さま軍団」だ。正確な人数は分からぬが、構成員は三〇歳未満の独身女性に限られているそうな。

昔から、こいつはそうだった。異常なくらい女にモテるくせに、トラブルに陥ることなく、すべての関係をきれいに処理して、しかも平然としていた。ここまで圧倒的だと、他の男たちのやっかみの対象にすらならない。

近寄らぬが吉、である。

俺は特に気にはならなかつたが、もし魔理歌という存在がいなければ、こいつの首を絞めていたかもしれない。

修は心底うんざりしたように自分の軍団を見やつて、ため息をついた。

「つたく。年がら年中盛りのついた猫みたいに。いい加減勘弁して欲しいぜ。ちつとはほつとけつてーの」

「俺を女避けの道具に使うなよ。あとで恨まれるだろ？？」

「お、分かつてるじやないか、我が親友 とも よ」

そう言つて修は、俺の肩に手を回してきた。

そのまま貴婦人をエスコートするように、ハリウッド男優さながらの笑顔を振りまきながら、フロアを出て行く。

おい、勘弁してくれ。

「あ、あの……」

「わるい。今日はさ、こいつとの先約があるんだ。だから、また明日、な

「は、はい……」

修さま軍団の筆頭である事務職の女性が、熱に浮かされたような顔で答え、健気に首を縦に振つて、最後に俺を ものすげい形相で睨みつけてきた。

彼女だけではない。修さま軍団全員が同じような反応である。

「ううつ、すさまじい負のオーラを感じるぜ。

まあ、魔理歌がいる俺には、会社の中に恋を求める必要はないわけだ。したがつて、女性社員の評判など、気にする必要もないわけだ。

……それでも、すげく悲しいぞ。

「うまくいったな、おい」

がつくりと肩を落とす俺の背中を、嬉しそうにばんばん叩く修。

「うまくいったのは、お前だけだ！」

ピシリ！

反射的に、手の甲で突っ込んでしまつた。

(4)

「……ほんとうか！ そいつはすごいな。直接か？」

小汚い中華料理屋の、薄汚れたふたりがけのテーブル。

俺たちが頼んだランチメニューは、半チャーラーメン。ラーメンに通常の半分の量のチャーハンがついてくる定食だが、修の皿に盛

られたチャーハンの量は、明らかに俺のものより多かつた。

「この店の主人であるおばちゃんは、明るく元気で……おまけに面

食いなのだ。

だが今の俺には、そんな差別など、心地よいそよ風程度にしか感じられなかつた。

「いや、さすがに直接は無理だつた。でも、何とか頬み込んで、パジャマのボタンは外させてもらつたぞ」

「ようするに、ブラ乳か？」

「ああ、ブラ乳だ」

「やつたな」

「ああ。興奮して、朝まで眠れなかつた」

まるで盛りのついた高校生のような会話である。

幸いなことに店内は騒がしく、俺たちの会話に耳を傾けている客はいない。

大学からの付き合いである修は、魔理歌にも話せない悩み事を気軽に相談できる、今となつては貴重な友人だつた。こういった裏話に対しても意外なほど口が堅いし、何よりも俺の事情をよく分かっている。だから、魔理歌の胸に触つたという、大人の付き合いとしてはじく些細な行為にも、心底驚き、感心したのだ。

小さな丸椅子に窮屈そうに座つていた修は、平皿の上にレンゲを置くと、両腕を組んで感慨深げに唸つた。

「「」の国に来るまでのマリカさまは、男性不信のきらきらえを感じられたからな。まさか五年間で、脣び「」が胸まで許されるとは……。やはりお前は、たいしたやつだよ」

「ん？ 今、何つて言つた？」

「マリカさま？ 婆さんじやあるまいし、いつたい何を……」

つい先ほどまで修は、魔理歌のことを呼び捨てにしていたはずだ。

軽く笑い飛ばそうとして、俺は失敗した。

昨夜、初めて知つた魔理歌の事情は、まだ修には話していないはず。

田の前にいる優男は、普段のちやらけた表情ではない、どこか風格さえ感じさせる笑みを浮かべながら、説明した。

「オハラマ王国の王族が、成人の儀を行つたあと、一定期間、他国へ居住を移すといつ話は聞いたな？ 実地研修制度といつやつだ。……そして五年前、マリカさまが選ばれた国が、ここ日本だった」「俺はぽかんと口を開けたまま硬直している。

「もちろん、衣食住や生活費などに不自由することがないよう、最低限の便宜は図られる。だが、それ以外のこと たとえば、異国の文化を学んだり、『学友を作つたりといった行為は、そのお方の自由意志に任せられる」

「……」

「とはいえ、異国の中では何が起こるか分からんからな。完全に放任するわけにもいくまい？ だから、現地の住民の姿を装い、さりげなくそのお方のサポートをしたり、密かに護衛したり、定期的に生活の状況を本国へ報告したりと……。まあ、監視人のような役割を担う者が送り込まれるわけだ。つまり 俺のことだが」

「……ちょっと待て」

またもや不意打ちである。

しかも、そんな重大な告白を、小汚い中華料理屋であるんじゃない！

魅惑的な香りを放つ中国茶をひと口飲んで、気を落ち着かせながら、俺はこめかみの辺りを揉み解した。

寝不足気味の頭に活を入れて、修との出会いを思い出す。

あれは確か大学のキャンパス内……魔理歌と初めて出会った、同じ日、同じ場所だった。

道に迷つた子供のように、きょろきょろと拳動不審な様子で大学構内を歩いていた、外国人の美女。スケベ心を隠しながら、あくまでも紳士的に案内役を申し出た俺。

偶然、同じ講義を受けるところだったので、一緒に歩いていたら、いつの間にか修 こいつ がいたのだ。

『いやー、助かったよ。ちょうど俺も、道に迷っていたところだつたんだ。いや、この大学は広いねー。はつはつは』

とか、わざとらしく笑いながら。

最初のころは、魔理歌に声をかけるたびに修が現れて、何かと俺の行動が邪魔されていたような気がする。その時の俺は、修に対し魔理歌を争うライバル心をメラメラと燃やしていたものだが。……ひょっとして、護衛、していたのか？

「何か質問がありそうだな、英貴？」

面白いことを隠しているような顔で、修が聞いてくる。

無言のまま、俺は右手を上げた。

「……どうぞ」

「お前の名前は、田中修一。出身は山形県で、両親は専業農家。ヒトメボレを作っている」

「はずれだ。俺の本名は、シユウ。だから、いつものように呼んでくれればいい。出身はオハラマ王国の首都、ザンデだ。両親はいいい」

「女にモテるために、髪を金色に染めて、いつもカラー・コンタクトを入れている」

「はずれ。髪も目も自前だよ」

「オハラマ王国の住人である修君は、実は王女さまの監視人で、俺と魔理歌の生活を、ちくいち王国に報告していた」

「正解」

「そして、俺が魔理歌にプロポーズしたことも、密告 ちく つた

「 大正解！」

大喜びで拍手をする修。  
てめえ、このやろーつ！

「だが、密告るつていう表現はやめて欲しいな。こっちも仕事なんだ。もし俺が、お前とマリカさまの関係を黙認したら、どうなると思う？ 俺は問答無用で解雇 クビ だし、すぐに代わりの守人もりびと つまり監視人が来て、厳しく査定されるぞ」

「……査定？」

「お前が、マリカさまに相応しい男かどうかってことだ。砂糖とクリームをたっぷり入れた俺の報告書に、少しは感謝してもらいたいね」

「どれくらいだ？」

「うん？」

「お前の、俺に対する評価は、どれくらいだ？」

「うーん、そうだな。俺たちの会社でいう、Bプラスってところか」

「……まあまあだな」

「だらう？」

一気に脱力してしまった。

のん気そうに話をしているが、その内容は極めてシユールである。ようするに俺は、友人だと思っていた男に、ずっと騙されていたわけで……。素直に納得するには、色々と心の葛藤があった。

あつたのだが……。

感情に任せて怒りをぶちまけたとしても、得られるものは何もないことくらい、俺にも分かっていた。こいつにも、こいつの事情があつたのだ。

仕方がない。五年間の友情に期待して、せいぜい貴重な情報源になつてもらおうか。

俺は再び右手を上げた。

「ブー、質問タイム終了」

「何でだよ！？」

修は苦笑して、幅の広い肩をすくめた。

「こういう気障な仕草が、嫌味なくらいに似合つ男だ。

「わるいな。今の俺には、自分の正体を明かすことくらいしかできないんだ。聞きたいことは山ほどあるだらうが、勘弁してくれ。時がきたら、いくらでも情報を提供するし、手助けもしてやれると思う

う」

さりげなく俺は、修の様子を観察した。

嘘をついている人間や、自分の言葉に自信を持てない人間の目には、力が宿らない。瞳の輪郭がぼやけ、視線が揺らぐことさえある。しかし修の目には、力があった。

いつも冗談で生きているような、つかみどころのない男だったが、今は違う。

もしかすると、こちらが修の本性で、普段の軽薄そうな言動はすべて演技だったのかもしれない。

俺は吐息をつき、それから自分と修の湯のみにお茶を注いだ。「分かつたよ。今は何も聞かない。だが、ひとつだけ頼みがある」「いいだらう」「うう

そう。これだけは、是非ともお願ひする必要があった。

俺はぱちんと両手を合わせて、頭を下げた。

「頼む！ ブラ乳の件な、あれだけは、報告しないでくれ！」

修は一瞬、虚をつかれたような顔になり、それから……店の喧騒を吹き飛ばすくらいの大聲で笑い出したのである。

(5)

俺が会社に行っている間、魔理歌は暇を持て余しているわけではない。

茶道、華道、日本舞踊、習字といった習い事に勤しんでいた。花嫁修業の一環なのかと思っていたが、そうではなかつた。オハラマ王国の王女として、異国の文化に触れてみたいという好奇心の表れだったのだろう。

家にいる時には、おもに刺繡を縫つたり編み物をしたりしている。そのおかげで、俺たちの部屋には、やけに格調高いテーブルクロスや、タペストリー、花柄模様のクッションなどが飾られていた。

もちろん、セーター やマフラー や手袋に不自由したこともない。

習い事にかかる費用は、すべて魔理歌の口座から引き落とされているようだが、その残高については、魔理歌自身、把握していないところ。

さらに、魔理歌の財布の中には、黒地に細かな模様が描かれた謎のクレジットカードが一枚入っていた。限度額が無制限という逸品で、請求書どころか、利用明細すら送られてこない。

おそらくこれが、修の話に出てきた「最低限の便宜」というやつなのだろう。

ちょっと怖かったので、なるべく使わせないようになっていたのだが……。

どうせなら、湯水のごとく使っちゃえばよかつたかな。  
さて。

本日の俺は、定時退社。

太陽が沈まぬうちに家に帰つて、万全の体制で待ち構えていた。どちらかといえば、俺よりも魔理歌のほうが気合が入っているようだ、

「絶対に、エイキとの婚約を認めてもらいますから!」

と、頼もしい勝利宣言(?)まで飛び出した。

とりあえず、ガルダ婆さんが再び迫つてくるであらう婚約解消の件について、俺と魔理歌は対策を考えていた。

オハラマ王国では、イシュディスとかいう契約の神さまの名の元に、約束事が大変重要視されているらしい。書面で交わさなくともその効力が認められるほどで、俺と魔理歌の婚約を解消させるためには、当事者である俺たちが、そろつて同意しなくてはならないそうだ。

極端なことを言つならば、俺たちが感情的になつて拒否し続ければ、王国側は何もできないということだ。

だがそれでは、魔理歌と彼女の祖国との関係に、遺恨を残すことになるだろう。

だから、まずはガルダ婆さんの話を聞く。しつかり話を聞いて、それから粘り強く説得し、俺たちの関係を認めてもらつ。

これが基本方針である。

ようするに、大人の対応といつやつだな。

問題は、ガルダ婆さんが大人気ないといつことだ。

プライドは高そうだし、頭は固いし、すぐに暴力を振るうし……

そういえば、あの謎の攻撃、衝撃波のことを聞くのを忘れていたな。来客を告げる呼び鈴が鳴つたのは、その時である。

玄関の扉を開けると、そこにはガルダ婆さんと修がいた。

「……」

喜劇役者のような、派手な格好で。

ガルダ婆さんは、白地のゆつたりとした衣を身に着け、頭には奇妙な銀細工の冠をのせていた。服の裾は地面に触れるほど長く、尖つた靴の先の部分だけが見えている。首には勾玉を繋ぎ合わせたようなネックレスをかけており、何といつか、邪馬台国の巫女装束を連想させた。

そして修は、紺色と黒を貴重とした古風な礼服姿だ。ドーナツ型のボタンが、これでもかといくらいついており、尖つた両肩の先には銀色の短い糸がモップのように張りついていた。胸元には白色のスカーフに、カメオのような飾り物。皮のベルトには、細かな浮き彫り レリーフ が施された細身の剣を差し、膝まであるブーツは、左右の開き具合がきつかり六〇度で気をつけをしている。

「……いらっしゃい」

俺にできた反応は、それくらいだった。

知り合いでなければ、真っ先に扉を閉めていたことだろう。

後ろからやつてきた魔理歌に、ガルダ婆さんは恭しく一礼した。

そして修は、その場で肩膝と右手の拳を地面につけ、頭を垂れた。まるで、主に忠誠を誓う騎士のような格好 ポーズ。

「お待ちしておりました。ガルダ、シユウイチ……いえ、シユウですね？」

「はつ。守人の役目を仰せつかつた身とはいえ、これまでの、姫さまへの数々のご無礼、お許しください」

「お顔を上げなさい、シユウ。わたくしもエイキも、あなたのことを親しい友人と思つています。それは、あなたの身分を知つた今でも、変わることはありますん」

「もつたないお言葉……」

真面目だ。

この人たちは、すぐ真面目にやつている。  
どさり。

ふいに家の外から物音が聞こえ、ガルダ婆さんが反応した。  
年に似合わない俊敏な動きで向き直り、両手を胸の前に合わせる。  
ぎりりと睨みつけた視線の先には……。

お隣に住んでいるひょろりとした学生さんが、買い物袋を落としたまま、びっくりしていた。

「何ものじや」

……婆さん。そりやあんたのほうだよ。

変人　　おそらく、コスプレマニアと思われただろう。いい年こ  
いた大人が、こんな格好して。とほほ……。

俺までお仲間と思われては、たまたまものではない。

「ああ、君。ちょっと待つてくれ。違うんだ、これは

……これは、何だらう?

本物? そっちのほうがやばいような気がする。

迷いに迷つた挙句、俺はにっこりと笑つて、

「これはね、コスプレなんだ!」

学生さんは、後ずさりした。

八畳ほどのフロアの中央に置かれた、こたつテーブル。

座布団に座つてゐるのは、俺と魔理歌と、邪馬台国の巫女と、軍服の騎士。

怪しげな一人の格好は、オハラマ王国の儀礼用のもので、正式な使者としての体裁を取り繕つたということらしい。

俺はお密さま用の紅茶、アールグレイを、きちんと温度と時間を計つて出すことにした。

「九条殿」

先日とは打つて変わつて、ガルダ婆さんは改まつた口調で俺の名前を呼び、自己紹介と挨拶をしてから、用件を述べた。

「マリカさまの『学友として、貴殿を我がオハラマ王国に招待いたします』

婚約者ではなく、学友ときたか。

「招待されるとは恐縮ですが、俺は、何をすればいいのでしょうか?」「我が國の国王陛下は、現在、異国之地にて研修の儀を行われている『息女、マリカさまのことを、いたく気にかけていらっしゃいます。』学友であらせられる九条殿を『』招待し、マリカさまの普段の生活などを、直にお聞きしたいと……」

婆さんのこめかみのあたりがぴくぴく動いていた。一般ピープルである俺に対して、相当無理をして敬語を使つているようだ。

「学友ということは、俺は魔理歌の婚約者とて、認められないといふことでしょうか?」

「……」

ガルダ婆さんは沈黙する。

俺はちらりと魔理歌に視線を送つた。

「答えなさい、ガルダ」

ぴくぴくぴく。

「……み、認める、認めないの問題ではございません。陛下は、魔理歌さまの『』様子をお知りになりたいと。わたくしめは、その役目を授かりまして……」

苦しまぎれの国会答弁みたいだな。

俺としては、腹を割つて話をしたかったのだが、相手側が駆け引きを仕掛けてきた。

さて、どうしたものだろうか。

婚約者の実家へ挨拶に行く　これは、男としては避けることのできない、人生最大級の試練である。ただでさえ重苦しいイベントなのに、その相手は国王陛下ときた。

これでは、断ることができないではないか。

断つた瞬間、俺の株価は一気に大暴落。意地悪な婆さんは、俺がいかに無礼者であるかを、嬉々として魔理歌の両親に吹き込むことだろう。

一度失った信頼を取り戻すことは、容易なことではない。

訪問するのはやぶさかではないのだが、ひとつだけ懸念があった。昨夜からのガルダ婆さんの言動からも分かる通り、どうやら俺は、魔理歌の婚約者として認められていないらしい。オハラマ王国へ旅立つのは一人で、帰国はひとりという寂しい状態だけは、何としても避ける必要があった。

「 分かりました」

俺は素直に頷き、婆さんの表情を観察した。

しわくちゃの口が少し緩む。

唇の端がわずかに上がり……しめしめといった表情。

しかし、分かりやすい婆さんだな。

俺は紅茶を口に含んで、背筋を正した。

「 ところで、オハラマ王国での滞在期間はどれくらいでしょうか？」

俺も仕事がありますので、あまり長期間というのは難しいのですが」

ガルダ婆さんは口元に手を当て、上品に笑った。

「 ほつほつほ。心配には及びませぬ。そう　三田もあれば、よろしいかと」

「 では、その後は俺と魔理歌は日本に帰つて、この家で普段通りの生活に戻れるということですね？」

「 そのように、考えております」

俺は信じなかつた。

考えは、変わらぬ恐れがあるからだ。

「では、オハラマ王国の名において、この場で約束してください。王国での滞在期間は三日間。その後には、必ず俺と魔理歌を、ともにこの家に送り届けることを。できれば、契約の神さまにも誓つていただけないと、ありがたいのですが」

「……！」

約束事が神聖化されているオハラマ王国では、この俺の申し出は、はつきり言って無礼以外の何ものでもないのだ。だが俺には、自分たちの生活を守る義務がある。遠慮などしてはいられない。

老婆の田<sup>ミ</sup>が細まり、口元が歪み、その隙間から唸るような声が漏れた。

「く、くじょおおお～」

「こわい。呪い殺されそうだ。」

空気が緊張し、老婆の白髪が静電気を帯びたように浮かび上がった。

「おおっ。怒髪天を突くところのは、このよつたな状態を指すのだろうか。」

内心どこのか全身に冷や汗をかきながら、俺は隣の魔理歌に視線を送った。

魔理歌はこくつと頷いて、

「ガルダ、約束なさい」

「ひ、姫さま！」

「そうでなければ、わたくしもエイキも、王国には参りません」

「……！」

はりりと白髪が落ち、長い沈黙が訪れた。

まったくもつて、前途多難としか言いようがない状況である。

ニュースや新聞を見ていても、一国の姫君が他国の一市民と結婚したという話は、聞いたことがない。それだけ出会いの機会が少ないということと、互いの立場や身分が障害になるということだろう。

最終的には、駆け落ちか

その不吉な未来の行く末を想像しようとして、やめた。

他人事であれば胸ときめく展開かもしけないが、現実的にはかなり難しいと思つ。

物価の高いこの日本での、身を潜めながらの生活。俺はともかく、お嬢さま育ちの魔理歌には、耐えられないかもしない。

「……分かりました。約束いたしましょ、う

苦渋に満ちた表情で、ガルダ婆さんは頷いた。

それで、話は終わりだった。実際に話した時間は、三〇分に満たなかつた。

今後のスケジュールについては、折をみて連絡すると言い残して、ガルダ婆さんと修は去つていった。

(6)

一時間ほど待つてから、俺は携帯電話で修を呼び出した。

どうやら俺からの電話を予想していたようで、修はすぐさまかけつけてきた。窮屈な軍服から、趣味のよい青色のシャツとジーンズに着替えていた。

「いや、ガルダさまにはまいったよ。お前になめられるわけにはいかんと言わてな。あんな礼服を着せられて。しかも電車だぞ、電車。子供には笑われるし、女子高生には携帯で写真撮られるし。ネットに流れたらどうしようつ

「とつとと入れ

ガルダ婆さんがないときに、ほとんどの何もしゃべらなかつたが、どうやらいつもの修に戻つたようだ。

「飯は?」

「実は、まだ食つてないんだ。王室秘書局との連絡調整とか、忙し

くてな」

「冷凍ピザならあるが、食うか?」

「食う食う。あ、ビールもある? 発泡酒じゃなくて、ビールね」

……贅沢なやつだ。

部屋に入ると、さすがの修も恐縮したように、頭をかきながら挨拶をした。

「マリカさま。ご無礼をいたしました」

「……」

魔理歌は修の顔を不思議そうに覗き込んで、

「シユウとは以前、王宮でお会いしていませんか?」

「はあ。実は、俺は近衛隊に所属しております。陛下の護衛中、何度かマリカさまにお会いしたことがあります。一度、お声もかけていただきました」

「なんだ。知り合いだったのに、今まで気づかなかつたのか」

大学のキャンパスで俺と魔理歌と修が出会ったとき、三人そろつて自己紹介をした記憶がある。

魔理歌は頬に指を当てて、可愛らしく考え込んだ。

「だつて。あまりにも印象が違いましたので。よく似た方だらうと思つたんです」

「……印象?」

俺が放つた缶ビールを受け取り、修が苦笑した。

「実はな。これでも俺は、国元じゃ無口で堅物の近衛騎士として有名だつたんだ。だがそれでは、魔理歌さまの友人にはなれないだろう? 悩みに悩んだあげく、自分なりに明るいキャラを作つてみたんだが……。お前や他の連中とつるんでいるつちに、馬鹿馬鹿しくなつちまつてな。今ではこの通りや」

修の役目は魔理歌の守人 監視人である。友人としてそばにいることが、仕事を果たす上で都合がよかつたのだろう。

しかし、無口な修というのも想像できないな。

「近衛騎士っていうと、SPみたいなものか?」

「警察じゃなくて軍人だが、まあよく似たようなものだ。おもな仕事は、王侯貴族や諸外国からくる要人たちの護衛だよ」

レンジがチンと音を立てた。

暖めたピザを出してやると、修はふはふと頬張り、美味そうにピールを飲んだ。

「……というわけで、オハラマ王国滞在中は、俺がお前とマリカさまの護衛役を、仰せつかることになった。ようしくな」

この言葉に喜んだのは魔理歌である。

「シユウがそばにいてくれるなら、心強いです」

口に出しては言わないが、俺も同じ気持ちだった。

まったく知らない国で、気心の知れた友人がひとりでもいるのといないのとでは、精神的な負担もかなり違つてくるだらう。

それに、色々と便宜も図つてくれるよつだ。

とりあえず、オハラマ王国の状況を聞いてみることにした。

「俺と魔理歌の婚約の話、どのあたりまで広がつてる？」

「國中大騒ぎ」ということはないだらうが、心構えだけはしておきたい。

「それを話すには、まず王國の組織から説明する必要がある。少し長くなるぞ」

「ということなので、俺は冷蔵庫から缶ビールとイチゴの缶チューハイを取り出した。

俺はもっぱらビール党なのだが、魔理歌は苦い飲み物が苦手で、果実で割つた甘い酒しか飲めない。アルコールは強くはないが、嫌いではないようだ。

「あ、俺ももう一本ね」

せせやかな嫌がらせとして、修には発泡酒を出してやる。

さらに、ひと口チョコ「」とポテトチップスを用意したところで、話を聞く準備が整つた。

「オハラマ王国には、日本でいう宮内庁のような組織があるんだ。名称は王室院といって、おもに王族の方々の生活の補助や、様々な

祭事を取り仕切っている

王室院は、三つの部署に分かれているといつ。

公務などのスケジュールを管理する、秘書局。

王室に関わる重要な行事を取り仕切る、祭事局。

そして、王族の世話や教育を担当する、宮侍局。

ガルダさまは宮侍局の長でな。さらに女官長も兼務されている。政治的な権限や決定権は持たないが、その分、王家の方々との距離が近い

「信頼が厚いってことか？」

「そうだ。いわば、『意見番のような存在だな。下手に逆らわない

ほうが身のためだぞ』

「……」

もつ、手遅れデス。

そういうことは、もつと早く言ひて欲しかったデス。

「今のところ、お前とマリカさまの関係を知っているのは、国王陛下と王配殿下、王室院の三局長と、俺の上司である近衛隊長だけだ。そして三局長すべてが、この婚約は認め難いとの見解を示している……前途多難だな、おい。

「王配殿下ってのは？」

「ああ、聞き慣れないかもしないな。今の国王は、マリカさまの母君つまり、女王陛下なんだ。そしてマリカさまの父君は、国王の補佐役という位置付けになつてている。その呼び名が、王配殿下だ」

「女王制つてやつか？」

「いや。長子相続制だ」

男女の別は問わず、第一子が王座を継ぐ制度らしい。

「魔理歌には、確か姉弟 きょうだい がいたよな？」

「はい。お姉さまと弟がいます」

ということは、魔理歌は第二王位継承権を持つてゐるわけか。

そのお方 僕の隣に座つてゐる王女さまは、両手で缶を支えな

がら、ちびりちびりとイチゴチューハイを飲んでいた。

そして、ひと口チヨンをぱくり。

幸せを噛み締めるように、もぐもぐ。

……まるで実感が沸かないな。

「王室院とやらのトップに認められないと、王族は結婚できないのか？」

「いや、そういうわけじゃない。あくまでも、参考意見として取り上げられるだけさ。最終的な決定権は、ご本人並びにそのご両親にある」

「つまり、魔理歌の両親を納得させることができれば……」

俺の仮定に、修はちょっと自信なさそうに頷いた。

「理論的には、結婚は可能、かもしれない」

「どっちなんだよ」

「分かるもんか！ 王位継承権を持つ王族と異国的一般庶民との結婚は、前例がないんだ。世論が納得するかという問題もあるし。こればっかりは予測がつかん」

修は一気に発泡酒を飲み干して、缶を握りつぶした。

「お代わり。ウイスキーはないのか？ ロックで」

「わたくしも。大きなブドウのお酒がいいです」

くつ 今日だけは、こいつのご機嫌をとつておかなくてはならない。

戸棚の奥から貰いもののウイスキーを出し、二人分のグラスと氷を用意する。魔理歌には大きなブドウ 田峰の缶チューハイだ。

「ちょっと待つてろ」

つまみがなくなりそうだったので、急いで出汁巻き玉子を作ることにした。溶き卵に粉末状の出汁の素を入れて、あとは玉子焼きと同じ要領。ものの五分とかからない。大根おろし＆ポン酢で食べるとい、これがけっこういけるのだ。

オハラマ王国での滞在期間は三日間。

その間に、国のお偉い方を何人も説得することは、実質不可能に

近いだろ？。

ということは、魔理歌の両親 特に母親である女王さまに、俺たちの関係を認めてもらつしかない。

自分を売り込むのも営業の仕事ではあるが、果たして、異国の王族相手に通用するのだろうか。

少なくとも、事前準備はしつかりとしておかなくてはならない。頬を上気させた魔理歌に、彼女の両親のひとつなりを聞いてみることにした。

「お父さまは、大きくて、優しい方です。でも、わたくしをいつまでも子ども扱いするんです。異国での研修も、本当はもう少し早い時期に行つているはずだったのですが、まだマリカには危ないからと言つて、なかなか許してもらえないくて……」

魔理歌は少し不満そうに口を尖らせる。

それから、けろりと笑つて見せた。

「でも、そのおかげでエイキに会えましたから、今は感謝しています」

俺は心のメモに記入した。

魔理歌の父 娘を溺愛。身体が大きい 力が強い。

優しいという項目は、あえて削除した。可愛い娘に甘くない父親などいないのだから。

昔のテレビドラマでは、娘の婚約者を父親が殴りつけるシーンが見られるが、実際にそんな目に会つた人はいない。いないはずだ。デキちゃつた婚でもないし、たぶん大丈夫だ。たぶん……。

「お母さまは、強くて美しい方。喧嘩では必ずお父さまに勝ちますし、宰相のオリンケさまや、ドルン将軍を呼び出して、いつもお説教をします。王宮では女王の中の女王と呼ばれているんですよ！」

魔理歌の母 強くて美しい。夫婦喧嘩では負けない 気が強い。宰相と將軍を呼びつけて説教する 気が強い。女王の中の女王 貢禄がある。

想像するに、相当プライドが高く、扱いづらい人物ではなかろう

か。

俺の思考を読んだのか、グラスの氷を鳴らしながら、修がからかうよつて言つた。

「どうひらじしろ、ひと筋縄じゃいかないな」「

「 るせい」

俺はウイスキーを一気に飲み干した。

とても素面でやつてられる状況ではない。

つまみが足りないと修に文句をつけられたので、野菜炒めを作ることにした。具材は冷蔵庫の中のあまりもので、ゴーヤとベーコンと炒り卵。木耳 きくらげ があると触感にアクセントがついてさらに美味しくなるのだが……まあ、いいか。

中華スープの素で味付けをして、ゴーヤのシャキシャキ感が残る程度に軽く炒める。

平皿を片手に部屋に戻ると、魔理歌が真っ赤な顔をして、ふらふら揺れていた。

缶チューハイ一杯で、いい感じのようだ。

「魔理歌、そろそろ寝たほうがいいんじゃないか?」

「……エイキまで、わたくしのこと、子供扱いするんですかあ?」

「いや、だつてさ。酔っぱらつてるだろ?」

「酔つてなんかいません。次は、赤いメロンのお酒です」「

ふむ、どうするかな。

ここ数日で立て続けに起こつた出来事により、魔理歌の精神もかなり不安定になつていていたのだろう。

そうでなければ、あの恥ずかしがり屋の魔理歌が、背中から抱きついてきたり、自らキスをしたり、胸を触つてもいいなどと言つはずがない。

そうだな。今日は最後まで付き合つか。

「わたくしはあ、もう子供ではありません」

「分かつた分かつた」

赤いメロンのお酒 タ張メロンチューハイを開けて渡してやる。

「ハイキとと婚約しましたし、昨日は、ABCのBまでこまました」

「え、A、B、C……」

いつたいいつの時代の話だよ。

「そんな言葉、どこで覚えた?」

「シユウに教えてもらいました」

野菜炒めをほお張つていた修が、ほふつと咳込んだ。

「修、お前……」

「いや、待て。違うんだ!」

グラスの酒を飲み込んで、再び咳き込む。

「マリカさま。まだ覚えていらっしゃったんですね」

「はい。恋愛のことはです

なんだそりや。

修はグラスに酒を足しながら、いい訳がましく言った。

「俺の仕事の中には、王族の研修先 つまり日本でのマナーや常識を、それとなく魔理歌さまにお伝えする、といつものがあつたんだ。だが、俺にしても日本は初めてだったし、恋愛レバ』とは苦手だったし。とにかく、その手の書物を読み漁つてな。……とある古雑誌の中に書いてあつたんだよ。恋愛のことは、それはABCつてな。たぶん、一〇〇年くらい前の雑誌だったと思つ」

「恋愛レバ』とが苦手だったのか?」

「言つたろ? 無口で堅物の近衛騎士だつたって」

あまりにもお寒い話に俺と修が沈黙していると、不安そつに魔理

歌が聞いてきた。

「……違うのですか?」

「いや、間違つてはないと思つけど、今はあまつやつこいつに方はしないんだ」

「では、何と言えばいいのですか?」

「何だ?」

今だったら、付き合つ= イコール Cだからな。  
Bまでの関係……友達以上、恋人未満、か?

いやいや、それでは俺たちは、恋人未満といつてになってしま  
う。

「うーん、何でいうか、ほら……」

「分からぬのですか？」

「うーむ

「では、お仕置きです」

「なんで？」

魔理歌は俺の後ろに回り込んで、「えい！」と、背中から抱きついてきた。

わおっ！

……って、こればっかりだな、俺。

酔っ払いお姫さまの素敵なお仕置きに、心底感動していると、

「うつ、あのマコカさまが、自ら男に抱きつかれるとは、成長されたものだ」

修が腕を手に当てて泣きまねをする。

お前、酔ってるだろ？

くそう、どうやら乗り遅れたみたいだ。

今夜は俺も弾けるぞ！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8569h/>

---

マ・リ・カ！

2010年11月12日11時22分発行